

昭和42年7月1日第3種郵便物認可  
平成15年8月5日発行(毎月5日1回発行)  
第43巻6月号(通巻529号)

# 風土

8



走り梅雨

神蔵

器

宇治十帖蛩に男時女時かな

簾して二条城御用菓子つか司かき

在五中将業平寺に走り梅雨

業平の東あずまの色に杜若

心太京に上ルと下ルあり

めぐり会ふ西行桜も夏木立  
西行の剃髪石やほととぎす  
泰山木は神の石座いわくら花ひらく  
妻の知らぬ月日の果の白緋  
山女追ふどろばう釣の影伏せて  
菩提寺の磴垂れて来ぬ花石榴  
ががんぼや二十四時間心電図

# 竹間集

同人作品



五箇山

柴田 由乃

雪溪の奥より湧けり白さ雲  
重畳の山や新樹の晴れ極む  
金鍬を生簣にあづく聖五月  
山からの水にたはむれ田を植うる  
鬼門除けのされかうべとやあいの風  
こきりこを聞くや夏炉の燻りに  
五月憂しこきりこ館の火縄銃

吹流し

高橋 邦夫

東京の風知つてゐる吹流し  
新茶賜ふ包の中の一筆箋  
虹二重子にせがまれし肩車  
御神馬の待機しづかな祭かな  
たかし忌の鍛冶の火影のやはらかし  
病む妻と蟻の足音聴く日かな  
偽りもときに労いたはり枇杷を剥く

毛虫垂る

南 うみを

あめんぼう吹かれて土を走りける  
玄関に至り着きけり夏落葉  
あぢさゐの無尽蔵なる雫かな  
えご落花にはたづみよりあふれけり  
職務にてたまたま詠じたものを、(三)  
みちのくは朴の青葉の並木かな  
石を割り幾百たびの葉ざくらぞ  
啄木の夢見し空ゆ毛虫垂る

たにはの里

大竹 淑子

風柔らか薬師の森の一華草  
巢籠りや人姿たえし御寺にて  
田搔きしてたにはの里の日を均す  
すかんぼやこはむかしの渡し趾  
南風吹くや塗を汲み出すもやひ舟  
橋立の草に遊びて雀の子  
草に座すことも療いやすしのあいの風

記念写真

島谷 征良

寝ね足りてなほもどかに花疲れ  
清明の雨のつめたさ肩にあり  
放哉忌無言で過ごす小半日  
記念写真一瞬つよき東風の中  
鎌倉の海へ遠目や甘茶仏  
ひさびさに家族そろひぬ啄木忌  
飛行機雲たちまち太る暮の春

草いちご

斉藤 小夜

文机に巻紙流す業平忌  
衣更へて定家かづらの香をまどふ  
借りて出る小粋な夫の夏帽子  
黒楽の壺に新茶を溢れしむ  
残り大原神社二句咲く禁裏の色の杜若  
茶筌しぼりの竹にみくじや風みどり  
草業平寺いちご昔と同じ刻動く

父の日

徳丸 峻二

全集の書架の傾き梅雨に入る  
たかんむかし竹の子句会なほなや昔ありける雨男  
江ノ電の乗り降り切符薄暑かな  
引越しの荷に加へられ羽抜鶏  
夏料理竹の風音聞きながら  
ネクタイを妻に任せて業平忌  
父の日や隠るるところあるならば

梅 雨

— 高橋 邦夫 —

曖昧な猫の鳴き声梅雨に入る  
梅雨仄し朱唇ほのかに観世音  
夕日いま駆込寺の花著莪に  
けふの髭また生えてくる梅雨じめり  
捨てられし音符さびしき梅雨の底  
荒梅雨に川の沈黙はじまれり  
梅雨寒し暗がりにある肥後守  
梅雨寒の吹かれて茶粥の湯気あがる  
否といふ目くばせしたる夏マスク  
梅雨の下校傘上げ下げの別れかな

梅雨深しさびしがりやの古こけし  
梅雨深し点字は指と懇ろに  
かんながらの袖をかざして舞涼し  
小公園に隣る税務署梅雨深し  
梅雨茫茫岩波文庫といふ青春  
三分の理立てて議論す梅雨晴間  
打ち合はせすみし蟻なり別れけり  
長梅雨につづく名忘れもの忘れ  
小さき手に毬返しやる芙美子の忌  
梅雨明けて妻の声とぶ朝厨

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

男だけの兄弟五人粽解く  
ぼうたんへ胸中の炎を移しけり  
水葉振つて濁らす夏祭  
パイ生地の息づいてをり麦の秋  
天心の海大観の山緑立つ

中村 洋子

透明なエレベーターに夏展く  
万緑へ白寿の枢担ぎ入る  
散る花にさざ波立ちて日暮くる  
月光に鈴蘭濡れて月匂ふ  
花冷や掌に亨け大樋の飴釉

小林 和子

ちなはの全長目算してみたり  
雷鳴に積木の家の倒れ落つ  
夕虹のその真ん中を夫戻る

柴田 久子

今もなほ屋号呼び合ふ夏祭

姫の結式

まなかひに烟る皇居や婚の燭

潮騒も一の鳥居やあふち咲く

樗咲くむかひ鎌倉女学院

磴百余涼しき界へ入りにけり

水面より揚羽生まるる滑川

切通し涼しき声のとほりけり

禪 京子

江ノ電に紫蘭のゆるる虚子旧居  
和賀江港の碑へ磯わたる薄暑かな

みがき上げて鍋に立夏の水みたす

子の心見えぬ日のあり薔薇匂ふ

殻も身も透く爪ほどのかたつむり

陣野今日子



# 風土独語／神蔵 器



ぼうたんへ胸中の炎を移しけり

中村 洋子

牡丹の真紅の炎が、作者の胸に移った、というのではなく、作者の胸中に燃ゆる炎が、牡丹に移り、牡丹が真紅の炎となつて咲き誇っているというのである。

作者には平成十三年の作（『金木犀』所載）に、

胸中にをさまらなくて髪洗ふ

洋子

という句がある。私は「胸中におさまらないもの」について私なりに推測し、あふれる黒髪に、わが身のいとおしさナルシズムの世界に溺れてゆく、ではないかと書いた。掲出句の「胸中の炎」は、それよりもっと強く激しいもの、彼女自身も驚いた熱い炎であつたらう。

水面より揚羽生まるる滑川

禅 京子

滑川は朝比奈峠の付近から源を発し、ほぼ鎌倉市を二分するような形で由比ガ浜と材木座を分ける辺りで海に注ぐ。先月の恒例の竹の子句会では、私も滑川に注目していたのであつたが、市の中心に入ると川幅も広く滑川らしくなるが水量が少なく

かまくらや浅きながれのさくらかな

永井 龍男

の風情が見られなかった。

それで、掲出句は報国寺へ入る華の橋あたりか、青砥藤綱が、五十文の松明を買わせて、滑川に落した十文銭を探させたという逸話の残る東勝寺橋あたりではないかと想像した。しかしこれは「揚羽生まるる」をポイントに考えた場合で、掲出句の主題は「滑川」である。滑川が滑川として生きる吾人のイメージと一致するところでよいわけである。

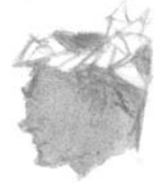
木の芽風 一丁倫敦 一直線

館 泰生

「徳川家康人府前は日比谷入江と呼ばれる東京湾の一部であったが、一五九三年以降埋め立てられた。内堀と外堀の間にあり、江戸城郭の内にあることから地名がつけられた。親藩、譜代大名二四の藩邸があり、大名小路とよばれた。一八七二年（明治五年）銀座の火事で類焼し、のちに陸軍の兵舎・練兵場となる。一八九〇年兵舎などの移転費用捻出のため三菱（岩崎弥之助）に一五〇万円で売却され三菱ヶ原と呼ばれた。一八九四年以降ロンドンのロンドン街に倣つて赤煉瓦造りのビル街を建設、一丁倫敦（ロンドン）と呼ばれた。」（『日本大百科全書』より「丸の内」）。

私などは東京に住んでいても、丸の内のビル街には足を運ぶ用もなく、日本の中の外国のような印象しか持っていないかつた。あらためて「一丁倫敦」のいわれを知り、「木の芽風」と「一直線」に古くて新しい日本の息吹、日本の底力を感じた。（以下略）

# 風土集



## 神蔵 器選

檜原村

ロケ隊は水を土産に木の芽風  
網繕ふ漁師で板前夏來たる  
豆飯や週に一度の大家族  
己が身を離れし原稿水中花  
校名に残る真砂や梅は実  
千年の王朝継ぎ紙朴ひらく  
法隆寺唐招提寺も緑立つ  
円相の一幅を掛け白牡丹  
腰越状声立てて読む夏帽子  
正座してマスクメロンをくづしけり  
江ノ電のポイント切り替へ夏燕  
異国へと続く夏潮和賀江島  
東慶寺に弥生子の墓の涼しかり  
葉桜の長谷に一石一字経

東京

柿沼 盟子

横浜

中村 洋子

横浜

池田加代子

小太りの父子みて筍直売所  
洛西の峰は競はず柿の花  
神殿を戻る日傘とすれ違ふ  
てのひらへ約束のごと初蛸  
万緑に西行桜三代目

長岡天満宮

高槻

浅田 光代

青梅に「清廉潔白」碑文かな  
目高散る日暮の風のいたづらに  
戸の猿の落ちる音聴く臍かな  
空海の突きし杖より山桜  
彗星の尾に触れてより墓に恋  
夏めくや海臨丸に波頭  
羽抜鳥の後より庫裡を通り抜け  
麦秋や衿のたちぐせなだめつつ  
老鶯や切株の椅子向きをかへ

横浜

近藤幸三郎

尼崎

大森 美恵